

「ヨハネの独白 (モノローグ)」 “John’s monologue”

私達の父である神と、主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなた方の上にあるように。アーメン。

今日は枝の主日、つい最近までは棕櫚の主日と呼ばれていた、それは英語で **Palm Sunday** です。これはイエス様がロバに乗ってエルサレムに入城した日です。時は紀元後30年の春、エルサレムは毎年行なわれる過ぎ越しの祭りに来ている人たちで一杯です。

イエス様はイスラエルの国中を巡り回り、神の国について説教をし、病気の者たちを癒してきました。つい最近、ラザロと言う友達を死人の中から甦らしたばかりです。いまやイエス様が神様から送られた、そしてイエス様は預言者によって約束されていたユダヤ人の救い主であることを全ての人に知らせるようにエルサレムに入城してきたのです。しかし、イエス様はロバに乗ってのエルサレム入城です。救い主とも言われる人が馬ではなくロバに乗ってきたのです。この救い主は何者と、とまどった人たちは多くいたと思います。然しそれにもかかわらず、群衆は「ダビデの子にホサナ。主の名によってこられる方に、祝福があるように。いと高き所にホサナ。」と棕櫚の葉を掲げて叫んでいたのです。ただ王様といわれる人だけが歴史的にこのような歓迎を受けてきたのです。

今日ここにイエス様の弟子のヨハネを連れてきました。どうぞその人から、イエス様の人生の1週間に起こった出来事を聞いてみてください。ヨハネを呼ぶことができますので少しお待ちください。(岸野牧師ヨハネの姿?で出てくる)

「私の名前はヨハネです。私はこの枝の日曜日にイエス様がエルサレムに入城したその場面をよく覚えています。イエス様は疲れているように見えました。イエス様を慕って多くの人が集まり、彼らの着ていた服を地面に敷いて、また、棕櫚の枝をかかげてイエス様を歓迎したのです。今や、この町の中でイエス様の名前を知らない者はいなかったでしょう。イエス様が群衆に語った時、その声と教えには今までに誰にもなかった力と権威がありました。イエス様がなされた癒しと奇跡はイエス様が神様から送られたものであったからこそ、それができたのです。

私と兄のヤコブは父ゼベダイの息子でガリラヤ子で漁師をしていたのですが、イエス様から従ってきなさいといわれ、彼の弟子として3年間一緒に暮らし

した。私がイエス様に出会ったとき、まさかイエス様が3年後十字架に架かって死ぬなど考えてもみなかったのです。

漁師仲間のペテロも弟子の仲間で、私たち3人はイエス様に連れられて山に登り、そこでモーセと預言者エリヤがイエス様と共に現れたのを目撃しました。その時、私は、イエス様は神様から送られた預言者であると思いました。

私たちがイエス様についていったのはイエス様が素晴らしい教え、説教、そして奇跡をなさる力を持っていたからです。私たちの多くは又イエス様によってヘロデ王を覆し、又、何時か、ユダヤ人がローマ帝国の支配から出ることができるよう願ったからです。

しかしイエス様は私達の要望に耳を貸してくれませんでした。それどころかイエス様は3回にわたって自分はまさに同胞のユダヤのリーダーによって殺されると語りだしたのです。私達の心が沈んだ、そんな悲しみを分かっていますか？

3年間イエス様と一緒に過ごした時の中で、イエス様が過した人生の最後の1週間ほど、興奮して毎日を過ごした日々はありません。この一週間に起こったことを語ってみたいと思います。

私たちがもともとエルサレムにやってきたのはユダヤ人なら全ての人が祝う過ぎ越しの祭りを守るためです。皆さんがご存知のようにこの儀式はユダヤ人にとっては一番大切なもので、それはモーセがエジプトより450年もの長い間、奴隷として暮らしていたユダヤ人をイスラエルの地に戻すにあたって、すばやくエジプトから逃げ出したことを覚える行儀です。神様は、子羊の血を全てのユダヤ人の家の玄関の戸に塗りなさいと命じたのでした。そのことによって神様はそこにいたユダヤ人の初子（ういご）の全てを守ったのです。エジプト人はこれ(子羊の血)を玄関の戸に塗らなかったので **Spirit of death** 死の霊) が家の中に入って来てそこにいた初子の命を奪ったのです。これを過ぎ越し、英語で **Pass Over** と言います。

又エジプトを急いで出るにあたって時間があまり無かったのでパン種を入れない、ふくらまないパンを作りエジプトから出て行ったのです。ユダヤ人はイスラエルの土地の戻った後、この **Pass Over** という儀式を何千年にわたって守って来たのです。

イエス様は十字架に架かる前日この **Pass Over** の儀式を12弟子とともに行いましたが、この膨らんでいないパンを取り、「これはあなたがたに与える私の

体」、又、ワインの入った杯を取り、「これはあなたがたのために流した私の血」とユダヤ人の儀式をキリスト教の聖餐式と変えたのです。

イエス様があなたたちは私を裏切る、私を見捨てると言われた時、私の心は沈みました。

人々はイエス様を裏切ったのはイスカリオテのユダでしたと言いますが、はっきり言って弟子の私たちはすべてイエス様を裏切ったのです。ペテロもユダヤ人のリーダーから「おまえはイエスの弟子だ」と言われ時、イエス様の目の前で、3回も「私は彼を知らない」と言い張ったのです。そこで鶏が3回鳴いたのです。

それはイエス様がペテロに前から言っていたことですが、何時も私はイエス様の#1の弟子と思っていたペテロ自身はその時、世界で一番惨めな人間であると感じたのではないのでしょうか？

イエス様が言われた言葉は数多くありますが、その中で特に私の心を引いたイエス様が私たちに約束された言葉があるのを紹介しましょう。「あなたがたは心を騒がせるな。神を信じなさいわたしの父の家には住むところがたくさんある。もしなければ、あなた方のために場所を用意しに行くと言ったであろうか。戻ってきて、あなた方をわたしのもとのに迎える。こうして、私にいる所に、あなた方もいることになる」。

後になって分かったのですが、イエス様が此の世に来られた理由は私たちに天国、神様の国があるのだよと言ってくださっていたのです。人は此の世での人生は、はかないものかもしれない、しかし何時か、神様のみ元へ私たちは送られていくのだよと言うことです。そこに私たちも何時か送られる。神様と顔と顔を合わすことができる国があるのです。イエス様を主と信じる私たちはこの神の国、天国を信じるのです。

以前、イエス様が何回も自分は死刑の宣告を受けるを話された時、私たちはそんなことがあるものかと思っていたのですが、ポンテオ・ピラトにより死の宣告を受けたことを知った私たちの中で、イエス様の十字架の元に最後までいたのは12弟子の中で私だけでした。それは私がもっとイエス様をほかの人より愛していたからではありません。私だってイエスの弟子だといわれることを恐れていました。

しかし、私はイエス様を慕った多くの女性と共にイエス様の十字架のもとでイエス様の死を経験しました。イエス様は7回にわたり十字架の上から語りまし

た。その一つはイエス様がお母さんのマリヤ様と私に語った言葉です。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」。あなたの子とは私のこと。そして私を見て言いました。「見なさい、あなたの母です」と。イエス様は私にイエス様のお母さんの面倒を見てくれるように頼んだのです。主のお母さん。私はマリヤ様が死ぬまで自分の母のようにお世話をしたそのことを光栄と思っています。」

イエス様はエロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ、それは「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのです」と十字架の上から叫びました。それは人の子として此の世に来られたイエス様の人間として苦しい叫びでしたが、人間の神様との和解は神様の送られたイエス様、まことの父であり、まことの子であったイエス様によって完成されたのです。

私達の信仰とは理屈では在りません。信仰とは神様を一生懸命祈ることではありません。信仰とは心を開きそこに神様、イエス様迎えることです。神様自身が私たちに信じる心を与えてくださいます。

主イエス・キリストが何時もあなた方を守り、導き、生きる喜びを与えてくださるよう祈ります。アーメン。